

第一章 西ノ京

講堂の本尊は弥勒如来坐像であつた。しばし見上げた後、スーツ姿のあずさは掌を合わせ、目を閉じて祈つた。

「新しい仕事が入りまくりますように」

目を開けて再びその像を見た。大きな黄金の仏像である。長い時を経て黄金色は黒ずみ、落ち着きを感じさせた。目は細めでつり上がり、ふっくらした唇の上と下にはわずかな髭が黒く曲がつて描かれている。右手は立てて掌をこちらに向け、左手は伏せて膝の前に置いている。光背では天女たちが羽衣を空になびかせて舞っていた。光背の下の方へ目を移せば、背に翼を付けた天女が透かし彫りになっている。天女と思つたが、翼のほかに二本の細い足が見えるので鳥なのかもしれない。

十数人の中高年のグループが案内人に連れられて講堂に入ってきた。あずさは弥勒如来を観るのを止め、隣の持国天立像の方に移動した。聞くとはなしに案内人の男の声が聞こえてくる。

「ここ、唐招提寺講堂の御本尊は弥勒如来と言って、ちよつと変わった仏様です。何が
変わっているかと言いますと、祈つて願い事をして、かなえてくだらないのです」
あずさは一瞬驚いて、案内人の方を見た。ボランティアの人のようで七十歳を幾つか
過ぎていると思われる小柄な人である。

「皆さん、弥勒菩薩って聞いたことがありますね？ でも、弥勒如来はあまり聞いたこ
とがないのではないでしょう。聞いたことある人、いらっしゃいますか」

誰も返事をしない。中高年のグループの一人が隣の人に話している声が聞こえた。

「弥勒菩薩ってよく聞くけど、弥勒如来って初めて聞いたわ」

他の人たちも同じ思いのようだ。その様子を見て案内人は説明を始めた。

「弥勒菩薩はお釈迦様の次に仏様、つまり如来になることが約束されているのです。し
かし、如来になるのはお釈迦様が亡くなられてから約五十七億年も経つてからです。ま
だ、五十七億年も経っていませんね。それなのに弥勒菩薩が先取りする形で弥勒如来に
なっていらっしゃる。まだ修行中なのに如来像になっているので、人々の願いを叶える
力がないのです。この弥勒如来の左手を見て下さい」

案内人は弥勒如来の左手を指差した。

「掌を伏せていますね。普通、如来は左手の掌を上に向けているものです。こういう風に」

両手で仏像の手の形を作りながら話を進めていく。

「右手は皆さんの方に向け、畏れることはありません、皆さんの願い事を受け止めましょう。左手は掌を上に向け、それを叶えましょうとの意味です。この弥勒如来は左手を伏せて甲の方を皆さんに向けていますから、願い事を叶えてくださらないのです」

グループの人たちが一瞬ざわついた。それでもほとんどの方が弥勒如来に合掌して頭を垂れ、拝んだ。その後、話し声を立てながらあずさの横を通って講堂を出て行った。

堂内が静かになった。あずさは先ほど自分が祈った仏像の弥勒如来坐像を斜めから見上げた。自分が事業成功を願ったこの仏像は、願いを叶えてくださらないのだろうか。それとも仏様のことだから、何か意味があるのだろうか。ふと誰かに見られているような気がして出口の方に目をやったが、誰もいなかった。講堂の出口の向こう側は明るく、白い地面とこげ茶色の落ち着いた建物が見えるだけだった。

唐招提寺の門前からタクシーに乗り、あずさは行く先を告げた。